

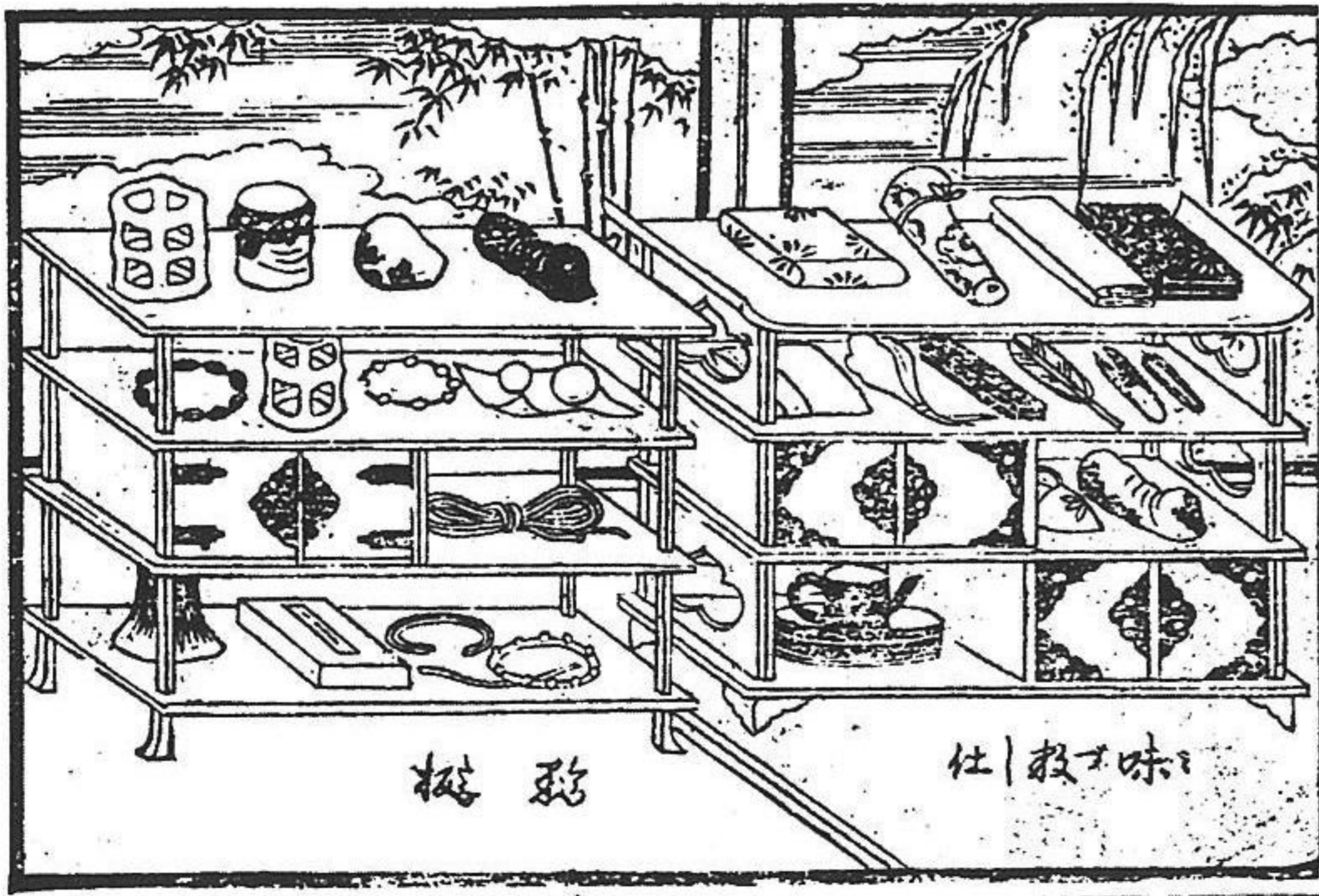
まえがき

江戸の性愛文化の斬新性と探求の深淵については、感嘆するばかりである。江戸の色道指南書を披見する時、飽くなき実践と観察という体験の凄まじさに圧倒される。西欧の科学的な性学の研究は、我が国の色道指南書の発刊よりも遙かに遅く、ハヴロック・エリスの『性心理学研究』（一八九七刊）には、我が国の色道指南書からの引用が随所にある。戦後、ヴァン・デ・ヴェルデの『完全なる結婚』（一九二〇成立）の翻訳本が具体的な数値や体位の記述により、我が国では一斉を風靡した観があり、さらにマリー・ストープの『結婚愛』（一九一八刊）やキンゼイの『キンゼイ報告書』（一九五三刊）など、庶民たちに大きな衝撃を与えた。しかし、実は、これらの西欧の性学の研究に先立つこと、二百年、詳細な挿し絵付きの性愛文化百科全書が、江戸の庶民たちの目に触れていたのである。

上方版の『好色袖鑑』（天和二―一六八二）には、交合の種別や性器のランクや衆道などが述べられ、『好色訓蒙図彙』（貞享三―一六八六）や『好色旅枕』（元禄八一―一六九五）には挿し絵が添えられて、性愛の諸相が描かれている。江戸の中期に至ると、溪斎英泉の『閨中紀

本書は江戸時代の庶民たちが性を楽しむために用いていた秘薬・秘具について、当時の文献や古川柳、詳細な図版三百六十点余とともに、効能、使用例も合わせて紹介した類を見ない秘薬秘具事典である。明治以降、江戸時代の諸文化は色褪せてしまった感は否めない。しかし、すでに約二百五十年以上前の江戸庶民の間にはこのような性愛文化が浸透していたという事実を現代に遺し、広く知っていただくために、このたび本名で復刊することとした。

三樹書房 編集部



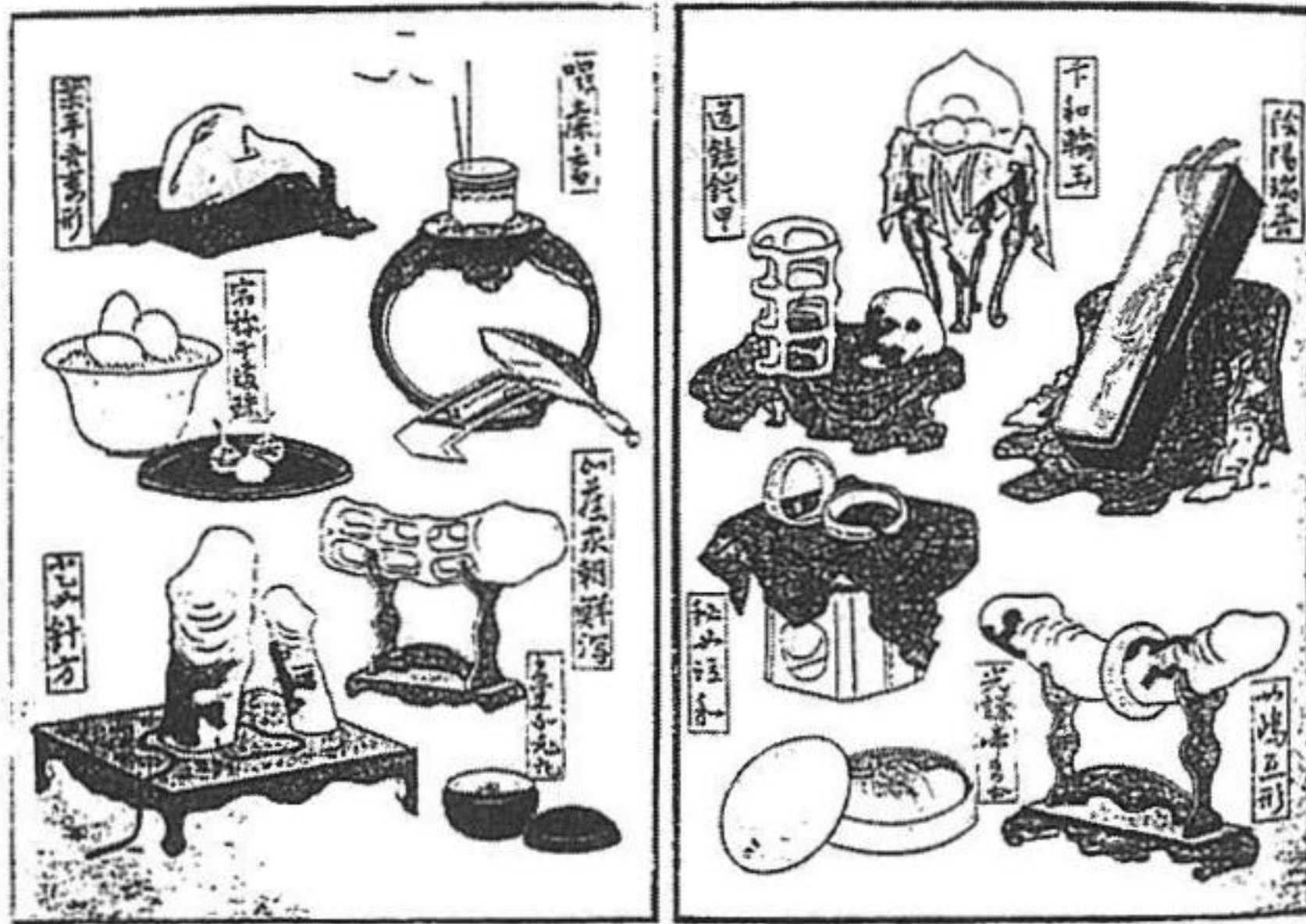
閨房用具を網羅した棚の図  
『婚礼秘事袋』（宝暦期―1756頃）

聞枕文庫』初篇（文政五―一八二二）は、正確で豊富な  
絵図と多岐多様な性愛技法を網羅した、まさに性愛文化  
の百科事典と呼ぶに相応しいほどの緻密さである。その

他の性愛秘伝書については、本文中に掲示したので、参看頂きたい。

本書に提示した閨房秘具の数々は、明らかに耕された江戸性愛文化の一端である。それを鮮烈に現代に蘇生させるため、具体的な映像としての絵図と、性愛の智恵を示す文献と、庶民たちの実感を寸言に凝縮した古川柳を多用した。かくも連綿とした秘められた文化が、江戸の庶民たちに浸透していたという事実を、現代の我々が把握しないのは、文化の断絶に他ならない。この逼迫した思いに駆られ、長年の蓄積をここに吐露する事になった。平成10年は、アメリカの血管膨張薬であるバイアグラが本邦にもたらされ、中高年の男たちが狂想曲を演じた年であった。それは性愛に執着する人間の業の凄まじさであり、交合に耽溺しながらも、勃起不全に悩む男たちの執念そのものである。しかし、その様相は、風来山人の『萎陰隠逸傳』(明和五―一七六八)の洒落の世界には遠く及ばず、現代人の心象の貧しさを露呈するものである。

筆者は四十年になんなんとする古川柳研究の実績があり、毎日、江戸の文献や絵図を味読しているが、バイアグラの出現により、かえって我が国の性愛文化の深淵を痛感する事となった。なぜなら、二百五十年以前にバイアグラに匹敵する、いやその効能を凌駕する閨房薬が存



秘具秘薬一覧  
左上より、業平吾妻形、羅廉香(催淫線香)、宿祢干満珠、加藤家朝鮮湯(胴形)、小乙女針方(張形)、香黒不老丸(服用薬)。右頁、左より、道鏡鎧甲(鎧形・兜形)、卞和輪玉(琳の玉)、陰陽瑞喜(肥後芋茎)、秘女泣和(姫泣輪)、光謙帝香合(催淫練薬)、女島互形(互い形)。「万福和合神」(文政4―1821)

性愛文化の一面として、真面目に秘具の諸相と実態を披瀝したものであり、類書の追従を許さぬ内容であると自負している。  
現代に「大人のおもちゃ」と呼称され、坊間に販売されている器具がある。本書に提示した江戸の閨房秘具が、これらの前身であり、その系統を引く物であるという、短絡的な関連を筆者は好まない。江戸期のそれは手作業

在していた事を熟知していたからである。「江戸時代にも、そんな薬があったんですか?」と、誰しも驚嘆の声を挙げる。それほど、現代は江戸の庶民文化を継承してないのであり、明治以降、旧弊として江戸の諸文化は抹殺の憂き目を見るに至っている。筆者は機会あるごとに述べているが、江戸が近くても手の届かない遠くにあるのは、時間的・空間的なものではなく、文化の断絶による隔越なのである。

現代の西洋医学に勝るとも劣らない秘薬が、江戸時代には存在し、それを処方して庶民たちが使用していたという、夢のような虚構の世界があった事に、感嘆の念を禁じ得ない。これらの閨房秘薬が、効能書き通りの薬効があったのか、それとも精神的な思い込みによるピグマリオン効果(仮想的なものを本物と思ひこむこと)なのか、それを実証する手だてはない。しかし、古川柳と艶本によって描かれた臨場感には、何物にも代え難い迫力がある。

秘具については、先人の著作として、『珍具入門』(中野栄三。昭和44。雄山閣。この著は昭和26年刊行の『珍具考』の改定再版である)があり、秘具と秘薬については『川柳四目屋致』(未知庵主人。昭和31。近世風俗研)があるだけで、これ以外には系統的に網羅した著はない。興味本位の蓄積の浅薄な書を散見するが、本書は江戸の

であり、かつ細工人の工夫と技の発露であり、それは先験的な秘具であり、性愛文化の一側面である。極論すれば江戸の秘具は芸術品である。しかし、現代のそれはマニファクチュア的であり、豊富な材料を駆使して、利益を得るための商品であって、器具というよりは器械である。したがって、欲を煽り、陰湿な享乐的な器械としての「大人のおもちゃ」と江戸の閨房秘具とは、軌を一にしない無系統なものである事を、強調したい。

閨房の楽しみを倍加させるため、江戸の人々は世界に冠たる秘薬と秘具を考案し、その実効性にエネルギーを注いだ。遠く隔たった過去にも、このような大きな夢が存在したのである。

現代の読者諸兄諸姉の方々が、動力は人力だけで、魚



閨房秘具一覧  
左から、兜形、琳の輪、海鼠の輪、鎧形、吾妻形、勢々理形、肥後芋莖、百茎摺、助計船、姫泣、長命丸(貝殻の黒粒)『書名失念』(発刊未詳)

一家	日本	一家	日本
○肥後瑞喜 陽物の形を水牛にてつくりしものなり。ひとり寝の女のたのしみをする道具なり。	○五形 はりかたの両頭なり。女二人してたのしむの具。	○張形 はりかたのちいさきものなり。女ひとりしてくじる具なり。	○草形 あつまがたのい、かわにて製す。ひとり寝の男のたのしむ具なり。

肥後瑞喜 陽物をふとくする為につく女甚よるこぶものなり。巻方に口傳あり。  
吾妻形 陰門のかたちをこしらへたるもの也。ひとり寝のおとこたのしむ具なり。  
京形 水牛にて作るはり方なり。  
張形 陽物の形を水牛にてつくりしものなり。ひとり寝の女のたのしみをする道具なり。  
互形 はりかたの両頭なり。女二人してたのしむの具。  
昂里 はりかたのちいさきものなり。女ひとりしてくじる具なり。  
茶釜 あつまがたなり。きれにてこしらへたるものなり。  
革形 あつまがたのい、かわにて製す。ひとり寝の男のたのしむ具なり。  
四つ目屋の秘具説明書(江戸末期)

### 古川柳出典凡例

引用川柳の出典明示について。

江戸中期より、前句付けの俳諧から派生した短詩型文学の川柳は隆盛を極めたが、これは明らかに言語文化遺産である。しかも、それぞれの一句が時代性を担っている。その時代性を明確にするのは、句の出典を明示する点にある。

壹、『川柳評万句合勝句刷』「宝暦七年寛政元年」にある句は、(宝十礼3)(安八桜5)のように示す。(宝十礼3)とは、宝暦十年の万句合勝句刷の、相印「礼」の3丁に掲載、(安八桜5)は、安永八年の万句合勝句刷の、相印「桜」の5丁に掲載の句という意味である。「宝」は宝暦、「明」は明和、「安」は安永、「天」は天明、「寛」は寛政の年号の略称。式、『俳風柳多留』初篇「明和二年」から百六十七篇「天保十一年」の句、並びに『俳風柳多留拾遺』初篇「寛政八年」十篇「寛政十年」の句は、(十二29)(二五七21)(拾二22)のように示す。これはそれぞれ『俳風柳多留』十二篇の29丁、百五十七篇の21丁に掲載の句、『俳風柳多留拾遺』二篇の22丁に掲載の句のことである。

参、『他評万句合勝句刷』の句については、(幸々評明八雅2)(菊丈評宝十二115)(松長評宝十三4)(苔翁評明元明1)と示す。これは「幸々評万句合勝句刷」の、明和八年の相印「雅」の2丁掲載句、「菊丈評万句合勝句刷」の宝暦十二年の11月15日開きにある句であり、その他はこれに準じる。肆、初代川柳選句集の、『川傍柳』二篇・三篇「天明元年」

油の灯火のもとで営々と生き抜いた江戸の庶民たちの稚氣にどのような共感して頂けるか、筆者の思惑はその一点に集約される。

渡辺信一郎



互形 張形なり。二人にて楽む具。水牛にて作。  
助舟 老人のへのこ、陰門の中這入勢なきに用ゆ。  
琳の珠 陰門の中に入て行ば常に十倍の喜悦をなす。  
蠟丸 玉莖にぬりて奇妙なり。  
『婦慈之雪』(文政7-1824)

同四篇「天明二年」、「柳篁」二篇「天明四年」、「柳籠裏」三篇「天明六年」などは、(傍二32)(傍四11)(篁二3)(籠三31)と表示する。それぞれ掲載句の柳書名と篇数と丁数である。

伍、破礼句集の『俳風末摘花』三篇「寛政三年」、「柳の葉末」(天保六年)、『真似鉄砲』(明和五年頃)に掲載の句は、(末三20)(葉末7)(真似鉄砲30)と表示し、書名と篇数と丁数を意味している。

陸、『神の田草昌湯樽』初篇(文化五年)と、『浪華柳多留』初篇(文政七年)と、『新編柳多留』初集(天保十二年)四十集(嘉永三年)と、『柳の緑』(天保十三年)と、『しげり柳』(嘉永元年)と、『こと玉柳』(文久元年)の句は、(田草一14)(浪華柳多留一15)(新七11)(柳の緑六2)(しげり柳上25)(こと玉柳中3)と表示する。表示内容は「肆」に準ずる。『しげり柳』(こと玉柳)は、上篇・中篇・下篇の別がある。

漆、幕末の句会の「石井宗叔追福会」(天保六年)、「風嘯居士追福会」(嘉永三年)、「東幸府天満宮奉額狂句合」(嘉永六年)、「九逸大松両霊追福句合」(安政二年)の句は、それぞれ(宗叔追2)(嘉三風17)(東天満狂句合58)(九大追26)と表示し、数字は掲載の丁数を表す。

捌、俳諧集の『俳諧武玉川』初篇(寛延三年)十八篇(安永五年)、『俳諧童的』初篇(宝暦元年)、『俳諧五万才』初篇(享和元年)、『俳諧妻楊枝』(文政七年)の句は、それぞれ(武十三23)(童的16)(五万才一44)(妻楊枝5)と表示し、肆に準じる。東行撰の大坂版の俳諧集『一句笠』(享保十年)の句は、このまま書名を示した。

まえがき 1

古川柳出典凡例 5

### 壹 秘薬の部

#### 第一 内服

##### 一 補強薬

1 腎水枯渴を防ぐ「膾肭臍」 13

2 強精の「山椒魚」 17

3 強壯・補腎の「黄精」 19

##### 二 腎水補益の「地黄」

1 六種の薬草を調合した「六味地黄丸」 23

2 六味・八味より三味が効く 30

三 補腎に効能ある「たけり丸」 32

四 硬直促進の「危樞丸」 34

1 七日間服用すれば老人なりとも 34

2 世界に冠たる勃起薬、その調合は 37

3 同類の妙薬「西馬丹」 39

#### 第二 男性が塗布

一 持続力長大な「長命丸」 42

#### 第四 秘薬多々

一 燻煙の「惚線香」の数々 101

二 締めりをよくする洗滌薬「楊貴妃小浴盆」 106

三 精を漏らさぬ「玉鎖丹」 108

四 広陰に用いる「如意丹」 112

#### 第五 勃起不全

一 提灯で餅を搗く 115

二 顎で蠅を追うのは「腎虚」 118

三 それでも欲するのは「火動の症」 123

四 「腎虚」は死しても硬直のまま 126

五 「腎虚」を治すには「補陰湯」 130

#### 第六 男色用

一 潤滑のためのあぶら薬 135

二 訓練用には「たんぱん」？ 136

三 ぬめり薬としての「いちぶのり」 138

四 上方では「安入散」「海羅丸」 139

五 ぬめり薬の秘方「通和散」 141

六 いわゆる「ぬめり薬」の処方 144

#### 第七 婦人薬

一 「月水早流し」は墮胎薬か 146

二 経口避妊薬「朔日丸」 150

1 もとは気付けの薬か 42  
2 元禄期から上方で使われた 43  
3 もう堪能という時に水を一服 45  
4 江戸の「四つ目屋」が専売 47  
5 通人にはあまねく知れ渡った 49  
6 その調合内容と売値は 51  
7 陰萎に即効 54  
8 間違えて口に飲むまいぞ 56  
9 使いすぎれば短命丸 60  
二 媚薬を和紙にしみ込ませた「喜契紙」 65

#### 第三 女人への塗布

一指に付けて挿入する「蟬丸」 69

1 外気に触れぬように生蠟でくるむ 69

2 その調合秘法は 72

二 女に美快を促す「女悦丸」 76

1 男根へ塗って挿入 76

2 調合仕様の数々 78

3 泣かずに泣かせて見しよう 81

4 その臨場感を味わう 83

5 秘薬の別法「無雙女悦丸」 88

6 黄菊・蛤・銀杏を代用にする 89

三 女が喜悅泣く「寝乱髪」 91

四 女に潮を吹かせる「床の海」 94

### 貳 秘具の部

#### 第一 女人専用

一 張形 155

1 その呼称と来歴 155

2 製作するのは張形師 161

3 小間物屋が箱の底に忍ばせて行商 167

4 張形のお得意先は孤閨の女たち 172

5 張形使用秘伝 178

6 その使い方の実際 181

7 驚くべき使用指南の書には 192

8 下女などは代用品を使う 197

9 張形の売価と張形早拵え 202

二 女が同時に楽しむ「互形」・「両首」 205

三 「久志理」・「勢々理」 211

四 絶珍品「ヘイコノインポ」とは 215

#### 第二 閨中女悦の具（男性使用）

一 先端に着用する「兜形」 218

二 太さを補充する「胴形」・「鍔形」 224

三 手近な物で作る「兜形」・「鍔形」早拵え 227

四 微妙な摩擦感を促す「姫泣輪」・「海鼠の輪」・「琳の輪」 229

五 原初的な女悦のための「肥後芋茎」 237

六 奏えたものをも入れるのは「助け舟」・「安楽船」 245

江戸時代の  
性愛文化

# 秘薬秘具事典

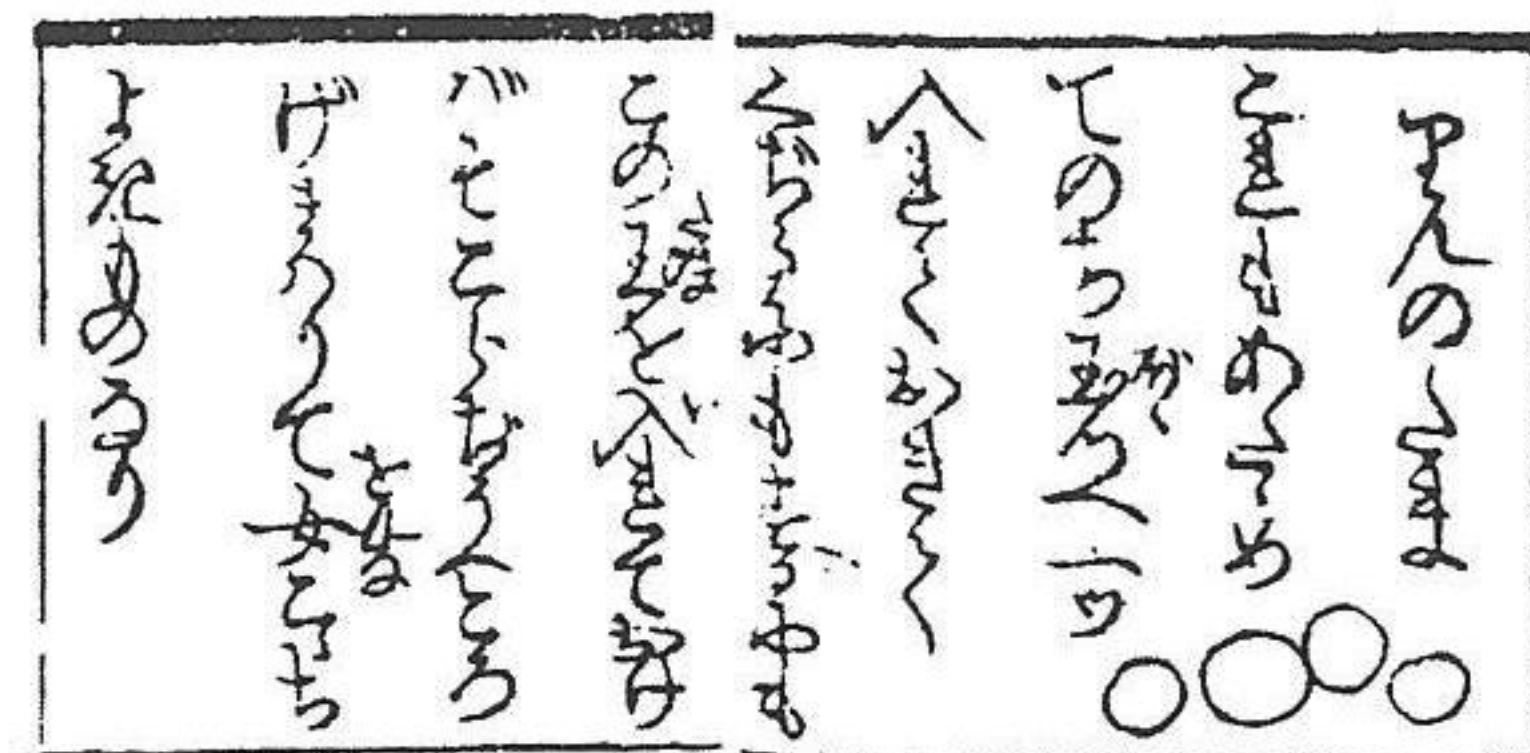
### 第三 閨中女悦の具（女人使用）

- 一 尻を叩けば転がり出る「琳の玉」—— 249
- 二 「琳の玉」早拵え—— 257
- 三 尻の下に敷く「鶴鴿台」—— 260

### 第四 男性独楽用

- 一 独り寝の男が楽しむ「吾妻形」—— 262
- 二 蒟蒻や真桑瓜で代用する「吾妻形」早拵え—— 266

あとがき—— 273



りんのたま  
 これもあたためてのち玉門へツ入れておきて  
 くぢるにもするにもこの玉を入れておけば  
 そらぢうへころげまハリて女こちよきもの  
 なり「文しなん」





大腎 (いわゆる腎張り)  
『好色訓蒙図彙』  
(貞享3—1686)

金満家で女  
好きな男、踊  
子(芸者)な  
どの綺麗どこ  
ろを数人引き  
連れて、花見  
や舟遊山など

膾肭臍は、北海に棲息する食肉目の海獣で、一頭の牡は数百頭の牝を従えていると言われ、その連想から「腎張り」(精力強壮にして淫欲豊富)の象徴となっていた。この膾肭臍の陰茎または睾丸の干物を粉にして服用すれば、補腎薬となると信じられた。

### 1 腎水枯渴を防ぐ「膾肭臍」

## 一 補強薬

# 第一 内服

<p>本圖膾肭臍、其形如魚、而色黑、其長五、其腹中、有三針、而堅、以此其毛、色似、毛而細、無子、足而、尾、兩、兩、有、鱗、而、黑、色、如、足、然、此、臍、而、非、本、算、諸、牡、馬、有、足、而、無、前、足、者、未、見、生、者、據、見、之、謀、也、有、牡、乳、難、辨、以、外、腎、有、無、別、之、其、外、腎、長、四、五、寸、大、如、小、指、陰、囊、黑、色、性、好、睡、眠、主、人、以、小、者、或、美、貴、之、五、六、月、生、子、此、時、之、遊、上、食、小、蝦、蓋、外、腎、連、臍、取、之、說、不、然、其、凡、初、食、之、則、毛、脫、皮、變、至、死、以、可、知、性、大、遠、也、其、小、者、石、所、毛、悉、平、虛、寒、人、食、其、肉、暖、臍、足、松、前、人、以、為、美、饌、也、肥、前、人、噴、龍、也。</p>	<p>とらるる 腎 海狗 膾肭臍 阿毛悉平 肥前人噴龍</p>
---	---

膾肭臍  
其の外腎を臍と曰ふ。臍を連ねて之を取る。中を補し腎気を益し腰膝を暖にし、又驚狂癩疾を治す。(略) 其小者を阿毛悉平と名く。虚寒の人、其肉を食て腰足を暖む。松前の人以て美饌となす。  
『和漢三才圖會』(正徳3—1713)

に行く。騒々しく嬌声を挙げて、ぞろぞろと付きしたがう女たちと、その先頭を威風を肩で誇示するように歩いている男、その情景を描いている。「腎張り」と「おつとせい」との結びつきは、好色な者たちには知れ渡っていたことが了解される。

『大和本草』(宝永五—一七〇八)には、  
膾肭臍とは其陰莖なり。へそに連ねて用いる故に、オットセイと云と時珍いへり。今外腎を用いずして全体を用て薬とするは誤なり。  
とあり、元来「膾肭臍」とはそのペニスの名称であり、それがいつの間にか、この動物の名となったという。そ

して、外腎と臍を同時に切り取って、それを薬用とするのが本物であるとしている。さらに『食用簡便』（貞享四―一六八七）によれば、

肉を切り味噌汁にて煮る。全体に右の効能にてはなし。外腎臍を連て切り、これを用て効能益あり。今、遠来塩漬の肉を世人、これを賞す。何ぞ其効全からん。又偽りて川瀬を塩漬にして用ゆる益なし。とあり、外腎と臍を連ねて切り取ったものは強精として効能はあるが、臍臍の肉は薬用にはならず、ましてカワウソの肉を臍臍と称して売っているのは、薬用としては偽り物であると述べている。

東京では戦前まで、強精剤としておとせいの丸薬や練薬を売っていたが、殆どが内容不明のいかがわしいものであったという。江戸期も大道売りなどが、口上宣言く売り捌いていた。『舊観帖』（文化二―一八〇五）に、江戸見物の老婆が日本橋の路上を見物して歩く場面で、これよりとふり町をゆき、中橋へんにて、大道売りが口上を言い立て、をっとせいの練り薬を、立ち止まる人に、一ト匙づつ振る舞う。

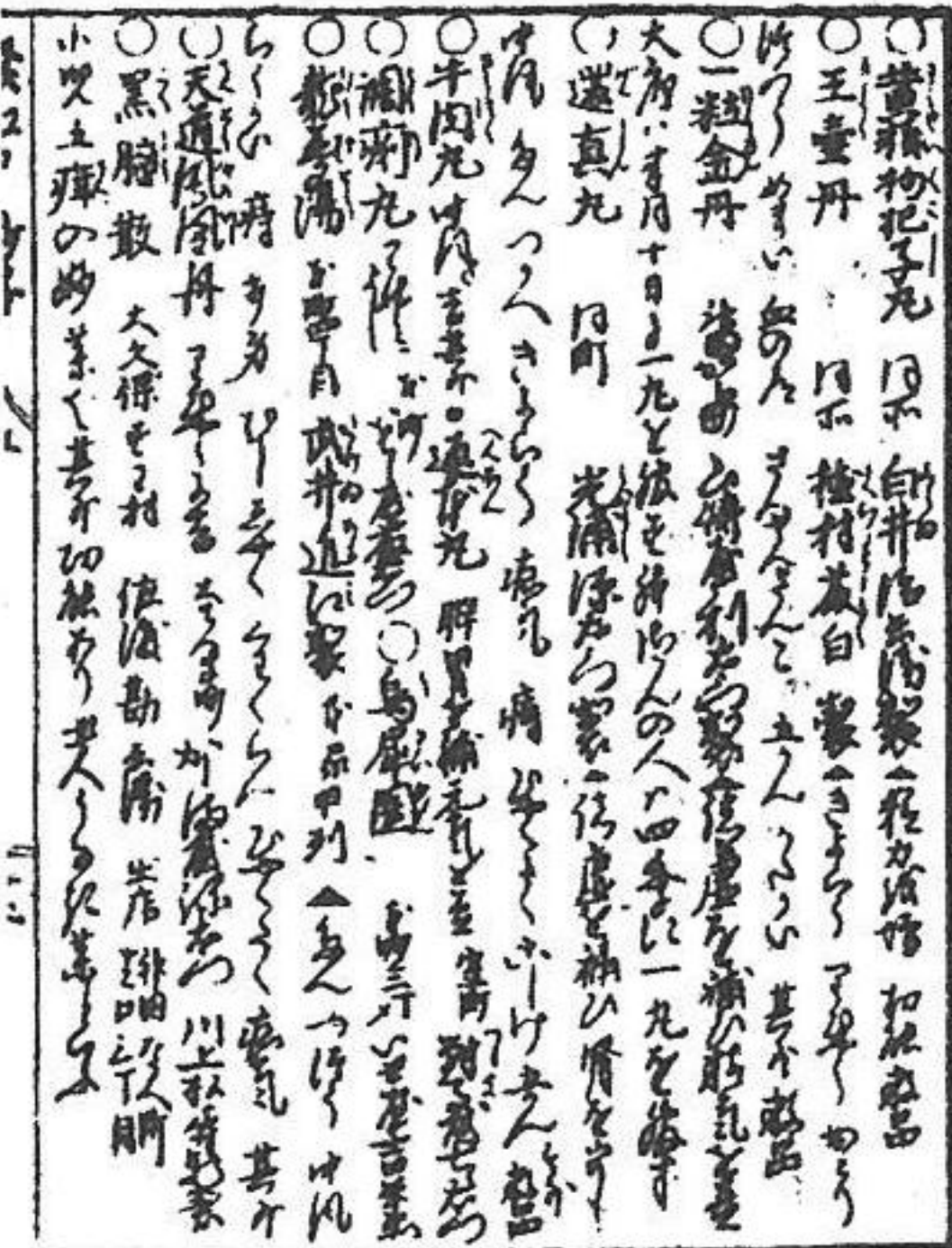
ばば「松前のおとせいだら。うらが国方だアから、ちく床しくおもひまさア。ふく介、もらつてなめて見めさろ」

福「モノちとくんさい」

きを持つ語彙であつたことがわかる。要するに、明和期（一七六〇年代）には、腎臓枯渴を防ぐための補腎薬と認識されたのである。

蝦夷地（北海道）の物産が入手しやすい松前藩や津輕藩などでは「一粒金丹」と称する家伝薬を作っていたと言われる。その薬方には諸説があるが、『くすりの民俗学』（昭和五十五。三浦三郎。健友館）によれば、

- 臍臍 二銭
- 阿芙蓉 二銭
- 龍腦 一厘
- 麝香 一厘
- 朱砂 三分
- 原蚕蛾 三分



一粒金丹『続江戸砂子』

ト指先へ付けて、なめて見る。

ばば「あまひかアよ」

福「エエ塩梅だアもし。これじゃア、何に利ますべい」

（中略）

ばば「なんぼだんし」

商人「此貝から此曲物までが、十六文から三十二文、五十、百と上げます」

とあり、蛤の貝殻に入れた練薬が十六文として描かれている。本物の臍臍の外腎を原料としていけば、安蕎麦一杯と同値段というのは、あまりに安価である。他の獣の乾燥肉を粉末にして練ったものである。こういったいかがわしい売り物が多かったようである。

おとせい転ばぬ為の薬の名・拾二22

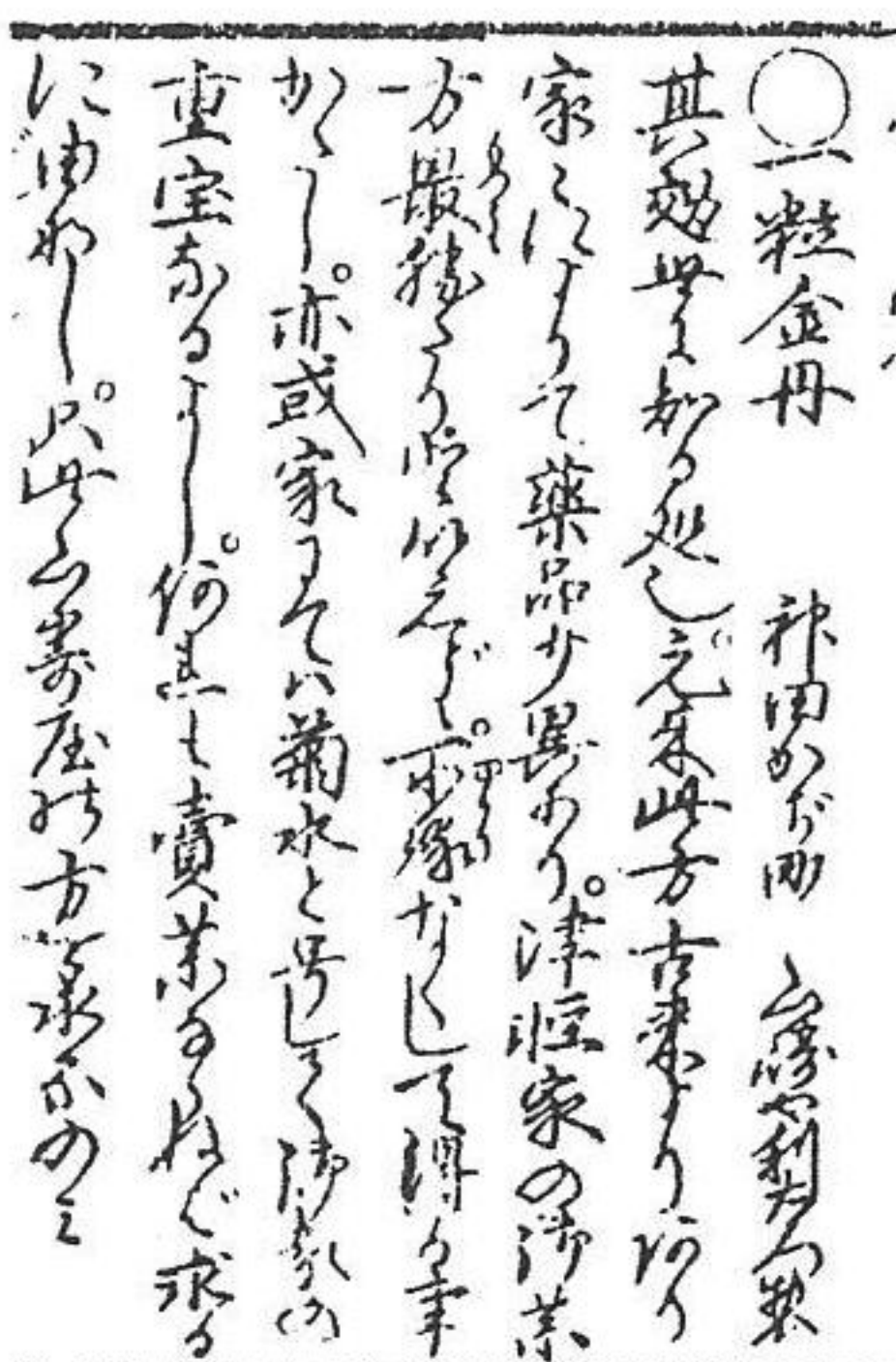
「おとせい」という強精剤の名を耳にした、当時の庶民たちの感想である。この場合の「転ぶ」は、腎臓が枯渴することである。また、道端で躓いて転びそうになる時、「おとと、せい」と発声することにも掛けている。「おとと、せい」と言いながら躓いて転倒した時と、同じような変わった名の薬であるとし、また「おとと、せい」と言いながら転ばぬように踏みとどまった時の、そんな珍妙な薬名であると言っている。この頃の庶民には、「おととせい」という語が耳慣れてはおらず、珍妙な響

とある。分量の単位は漢方流なので、中国式であり、不分明。単なる推測であるが、分の十倍が厘、その十倍が銭のようである。「阿芙蓉」は阿片、「龍腦」は南洋産の薬用植物、「麝香」はジャコウ鹿の生殖腺囊の粉末、「朱砂」は辰砂の古名で、水銀と硫黄の化合した鉱石、「原蚕蛾」は中国蜀地方の一番蚕のことである。これらを混ぜ合わせ、焼酎で煎じた射干（アヤマ科の多年草）エキスを練って丸薬とする。

この薬剤を忠実に作ってみたら、どうであろうか。現代の化学的な合成物よりも効き目があるかも知れない。

この「一粒金丹」は江戸中期には市販されており、『続江戸砂子』（享保二〇―一七三五）には、

一粒金丹。神田かぢ町、山崎屋利左工門製。▲諸虚を補ひ精気を益。大抵ハ半月十日に一丸を服す、躓さを



一粒金丹『江戸惣鹿子名所大全』



著者略歴

わたなべ しんいちろう (しゅんろあんしゅじん)  
渡辺信一郎 (薺露庵主人)

江戸庶民性愛文化研究者 古川柳文化研究者

一九三四年東京生まれ 早稲田大学卒業

元都立深沢高校校長

元東京都教育庁指導部指導企画課教員研修担当

二〇〇四年瑞寶小綬章受章

主な著書に『江戸の媚薬術』『江戸の性愛術』『江戸の閨房術』『江戸のおトイレ』(いずれも新潮社新書) 『江戸の生業事典』(東京堂出版)、『江戸バレ句戀の色直し』(集英社新書)、『江戸の知られざる風俗』(ちくま新書)、『江戸の化粧』(平凡新書)、『江戸川柳 花秘めやかなれど』『江戸の艶句「柳の葉末」を愉しむ』『江戸の破礼句・梅の宝匣』『江戸の破礼句・櫻の宝匣』『江戸の寺子屋と子供たち』(いずれも三樹書房) など多数。薺露庵主人の筆名もある。二〇〇四年没。

江戸時代の性愛文化 <b>秘薬秘具事典</b>	二〇一四年二月二八日第一刷発行	著者 渡辺信一郎 発行者 小林謙一 発行所 三樹書房	〒101-0051 東京都千代田区神田神保町一-三〇 電話 〇三(三三二九五) 五三九八 FAX 〇三(三三二九一) 四四一八	印刷・製本 シナノパブリッシングプレス
----------------------------	-----------------	----------------------------------	---	---------------------

©Katsuyo Watanabe 2014, Printed in Japan

本書の全部または一部あるいは写真などを無断で複写・複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者及び出版社の権利侵害になります。個人使用以外の商業印刷、映像などに使用する場合はあらかじめ小社の著作権管理部に許諾を求めて下さい。落丁・乱丁本は、お取り替え致します。